

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第二十五回

著者 中川由香

圭介は、幕臣、高級官僚、男爵と栄達しながら、質素儉約の人でした。明治十六年、圭介は東京学士会院で「儉素論」を講演しています。

明治維新で国民の気風が改まり、教育、軍制、農商工の進歩が大きく進歩しました。一方、衣食住を贅沢にし、人の心が軽薄になる傾向が生じます。特に海外で欧米の都会を目にした後、人々は華美な風俗を羨望し、衣服や家屋を真似しました。地方にまでその風潮が広がり、結果、貧困と国力疲弊の影が生じ始めます。その現状を圭介は憂慮します。

他国から機械を導入し産業を興し、便利な物品を生産し、作業の速さや質を競い、結果巨万の資産を得ることは誰も誹謗しません。また、若い頃に精励した結果、老後に安逸を得るのは、結構なことです。しかし、資産もなく分不相応に外見を豪華にし暖衣飽食する風潮は、問題です。このまま余財もなく浪費すれば、万一の災害の際には一家離散し、飢えと貧困に陥る者が多いだろうと、圭介は心配します。

海外の都市の壮麗さを羨むのは、表面しか見していない、内の実力を察していないと圭介は警告します。「西洋諸州は工業を振興し通商を拡大し、富を築き、実際に裕福である。しかし日本は、内は貧しいのに外面だけ良く見せようとしている。西洋人は一見贅沢な暮らしをしているように見えても、長く生計を営む事を考え、日

夜冗長な支出を省き、一銭の金、一枚の紙も無駄にしていない。」圭介は、舶来物に浮かれる当時の国内と、経済の実質を担っている西洋を比較します。

また、圭介が米国の炭坑を視察した際、中流階級で資産家となった坑夫の家に宿泊しました。その妻は四十歳で子供が二人。女中は一人のみで、十数人の家族従業員の料理を作り、家事を取り仕切っていたといいます。成功した家でありながら労苦をさらに惜しまない姿勢こそ羨望すると、圭介は述べます。

圭介は西洋の中でも特に、ドイツ・オランダ・ベルギーを最も質素儉約の美国と称します。圭介はベルギーで、杖と小袋を持ち二人の子供と共に汽車を降りる紳士を見ました。周りの人々が皆敬礼するので、あれは誰か尋ねます。すると紳士は皇帝で、二人の子供は皇子だということです。圭介はその装いが質素で簡易なものであることに驚嘆しました。累世の至尊がその姿勢であるからこそ、民衆が皆、質朴で慎ましいのだと感銘を受けました。

一七九〇年に勃発した普仏戦争では、プロイセンが勝利し、フランスのナポレオン三世が降伏しました。ドイツはフランスから多額の賠償金を得ました。これにより、ドイツ国内には大量の貨幣が流通し、民が安楽を極め衣食に贅沢となりました。富が国外に流れましたが、華美

の風習は残り、ドイツの国力が弱体化する一因となりました。一方フランスは敗北の後、多額の賠償金支払いを行わねばなりません。そこで節制し、工業に注力して産業を興し、必死に賠償金を完済しました。そしてなお余剰を得て、国力が増強したと圭介は分析しました。

国ですら、金を得て驕ればその弊害を受ける。しかし豊かでなくとも、勉勵すれば後に富貴となる。勤怠の応報は明らかである。そう圭介は指摘します。日本でも奢侈を制限して節制を進めるべきであり、そのような施策が古今あつたことを紹介します。仁徳帝、天智帝の恭儉、中世鎌倉の北条時頼の質素堅実さ、近世徳川幕府の松平定信、水野忠邦の驕奢を禁じた厳令を、圭介は高く評価しています。

そして圭介は、質素儉約の道を考究する為、二三の友人と共に儉素会を起しました。「蝸螂の斧で天下の形勢を変えることは難しいが、お互いに儉約を勧めれば大きな弊害の一端を救うことも無きにしもあらずだろう」と謙遜して述べています。

圭介は無闇な西洋礼賛ではなく、国々の政策や経済をマクロな視野で読み解き、冷静に現状を評価していました。そして、国を支えるのは個々の家庭の生計であるということを見抜くミクロな視点で、圭介はそのあり方を説きました。「勤儉主義でしみつたれと言われながら、出すべき理由あるものには万金も惜しまない、信念ある出納を行った」と林董は評します。単にけちな節約家ではない、本当に国と社会を豊かにするための方策を圭介は求め、その解として、儉約を広める活動を行っていたと言えます。